

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 公開学術講演会：描かれた近世の祭礼

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 福原, 敏男 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00001737">https://doi.org/10.57529/00001737</a>

公開学術講演会（平成28年10月22日）

## 描かれた近世の祭礼

福原敏男

### はじめに

ただいまご紹介いただきました福原と申します。

今回は國學院大學図書館所蔵『つしま祭』絵巻の話と、神田明神の神田明神祭礼に関する2資料について、三題噺のような形で進めさせていただきたいと思います。

渡る祭礼、渡御祭、行列、この問題につきましては、私も数年前に千葉県佐倉市の国立歴史民俗博物館でおこなわれた企画展示「行列にみる近世－武士と異国と祭礼と－」（会期：平成24年10月16日～12月9日）において、現在、同館の館長である久留島浩先生のもとで、「祭礼行列」のパートを担当しました。そのときのコンセプトは、特に前近代の城下町祭礼などは「渡る」ではなくて、権力者により「渡らされる」でした。

これはどういうことかと申しますと、外交行列、例えば、琉球慶賀使節、朝鮮通信使節、婚姻行列、葬送行列、祭礼行列にしても、國學院大學の根岸茂夫先生が研究なさっているような大名行列、参勤交代などの武家の行列にしましても、参加者としては行列を意図する権力のもとで、肅々と整列させられて渡るといことなんです。

祭礼の史料を見てまいりますと、「渡物」とありますが、江戸時代の史料は振り仮名が無いものですから、「渡り物」か、「渡し物」か、どのように読むかというのは難しい問題だと思います。参加者にとっては「渡り物」なんですけれども、もしかしたら、お殿様などが「渡す」という視点も必要かも

しれない。

あるいは、「通物」、これもよく出てきます。どういうものが「通り物」というと、歌舞音曲、つまり、お囃子を奏しながら、仮装してある物語を装って行列するもの、これを「通り物」といいます。

例えば、博多でしたら、名菓の名前にもなっている「通りもん」ですが、福岡藩主が上覧する博多松囃子の出し物が参加者から見ると通り物です。

これも「通り物」と読むのか、「通し物」と読むのか、主体が参加者だったら「通り物」、あるいは「通りもん」なんでしょうけれども、これが上（権力者）からの目線でしたら、「通し物」、「通しもん」になる。

特に前近代のこういうパレードが、近代に支配者の前を行く「行進」という用語変更になったとしても、みずからの主体的な意思ではなく、きちんと整列・進行させられることは変わりません。藩主上覧のある城下町祭礼行列でしたら、お殿様の前で「期待される行列の姿」を見せる。きちんと並ぶ、点呼がある、チェックがあります。このように「渡らせられる」行列という視点が国立歴史民俗博物館の展示コンセプトでした。

現在、日本政府は、京都の祇園祭をはじめ、33の山、鉦、屋台、山車のような祭礼造形物を、ユネスコの無形文化遺産に登録提案をしています。今月末頃に勧告があり（平成28年10月31日に「記載」の勧告）、来月の終わりぐらいにユネスコの無形文化遺産に登録される（平成28年12月1日に登録）ことを願ってのお話も含まれます。

今回、私は祭礼絵巻の中でも山車とか、山、鉦、屋台、だんじり、曳き山、立て物、船などの造形に注目してお話したいと思います。

従来、こういう祭礼絵巻の研究は、美術史の研究者が主に行っていました。特に祭礼図研究の中心は東京大学教授の佐藤康宏氏です。『日本の美術 484 祭礼図』<sup>(1)</sup>の中で、佐藤氏は、特に近世初期風俗画と呼ばれるジャンルの中でも、室町の終わりから近世の初めにかけて描かれた屏風のうち、賀茂競馬、

現在の京都国立博物館の正門の前で豊臣秀吉の七回忌として行われました豊国祭礼、滋賀県大津市坂本の日吉山王祭、京都祇園祭の4つの祭礼屏風を中心に、取り上げられています。

そして、佐藤氏は、それ以外は絵画表現としては見劣りがするとしています。この見解は美術史家としてはあくまでも絵画表現が命であるとして、正当な意見だと思います。その一方、正確な歴史民俗学的な資料という視点では考えない。いかにうまく描いているか、絵空事が含まれているかという関係ないんだ、という美術史家としての視点でお書きになっている。

摂津の住吉祭礼や、愛知県の津島祭の祭礼図屏風も、海外に流出したものを含めると、かなりたくさんございます。私は、佐藤氏が注目する4祭礼だけではなくて、あと2、3祭礼の近世初期風俗画を含めてほしかったのですが、美術史家の視点で分析されたということで、一定の評価は受けていると思います。

その本の中で佐藤氏は、「江戸時代の祭礼図」を付論として最後につけ加えられました。そして、江戸時代の祭礼図は熱狂の姿ではなくて、冷めた雰囲気になっている。祭礼の全貌を示すような画面から転じて、見物人や山や鉦といった個別のモチーフの細部を詳しく描く方向へ向かったとしています。それは記録画にはなっているんですけども、絵として見るべきものはそんなにない、というのが美術史家としての視点でした。

私は民俗的祭礼図として、絵画表現を重視するプロの絵師による作例でなくても、絵空事が排された、特に神田明神の祭礼図などは表現としては落ちても、美術史家の評価はそんなに高くなくても、記録画として、歴史民俗資料として使えるとして評価したいと思いました。

## 一、國學院大學図書館所蔵『つしま祭』絵巻 楽車・大山の疑問

愛知県・津島神社の津島祭は、現在は7月の第4土日に行われております。

### ・在外の『津島祭礼図屏風』

このスライドはフランスの東洋美術コレクターとして有名なエミール・ギメが集めましたパリのギメ美術館が持っている、『津島祭礼図屏風』（江戸時代前期、紙本着色、八曲一双）<sup>(2)</sup>の1コマです。夜宮、あるいは宵宮と書かれる前夜祭に出る巻藁船は、竹の先に提灯をたくさんつけた様子のお祭りです。翌日の朝祭り、本祭りになりますと、その巻藁と言われる提灯を一切取りまして、楽車（だんじり）船が姿をあらわすわけです。左側が楽車で、右側が大山です。大山は明治4年（1871）まで行われておりましたが、明治5年以降全てなくなりました。

大山は上から下まで20メートル程の高さを誇っていました。

大山は、特に濃尾平野、中京圏の山車、だんじり、曳き山、屋台にはいくつつか出ていて、中世的な雰囲気を残している出し物として注目されます。

鯛と大蛇が3層目の一番上に飾られ、その上に湯立て巫女のからくりが乗る。2層目のところに足摩乳（あしなづち）、手摩乳（てなづち）と呼ばれる高砂のような男女2体の人形が乗せられる。

楽車の上には、それを出す地域が、毎年異なる能人形をかざる。そして、下では、祭礼囃子が奏され、特に鞆鼓稚児舞（史料上、八撥）という2人の稚児たちが、腰のところに鞆鼓という大鼓をつけて打ちつつ舞う。

宵宮の巻藁船ももう一隻のほうに描かれていて、これはある意味では異時同図法により、同じ屏風の片双に前夜祭と本祭日、夜と朝両方が描き分けられている。

この屏風が描かれたのと同じ頃（寛永期頃）、京都「四条河原遊楽図屏風」によると、四条河原で軽業曲芸の蜘蛛舞と言われるアクロバティックな芸が行われていたらしく、この屏風の大山の帆柱にも同様な綱渡り芸が描かれています。これが絵空事かどうかというのは、史料批判がなかなか難しいです。このスライドも大山で、2艘の船の上にこのような櫓が立てられています。1層目、2層目、3層目が、それぞれ幕で覆われています。

拡大すると、こちらにも大山の上の部分に大蛇が巻きつき、鯛が飾られて

います。津島祭の大山には大蛇と鯛がつきものでした。そして、2層目の上には、やはり翁と媼、足摩乳、手摩乳とも言われる人形が置かれています。

その左側には楽車が描かれ、上には能人形、そして、2人の稚児による鞆鼓稚児舞が演じられています。

これは、大英博物館が所蔵している『津島神社祭礼図屏風』（寛文年間頃、紙本金地著色、八曲一双<sup>(3)</sup>）で、このスライドが前夜祭で、先ほどの車楽船の前夜の姿です。提灯がたくさんつけられております。

大英博物館蔵屏風解説では、車楽と大山のうち、大山のほうをクローズアップしたいと思います。

大山には大蛇と鯛が描かれ、2層目の上に足摩乳、手摩乳が飾られるはずなのですが、裏側にあるのか、省略されたのか、ここには描かれておりません。そして、こちらが楽車で、全部で5つ出ます。下の層にはやはり鞆鼓稚児舞がおりまして、その上に能人形が置かれます。毎年趣向を凝らして能人形を組み立てて飾るわけです。

近代津島祭を描いたいろいろな史料がありますが、明治4年まで出ていた大山には、「大山」と書く史料と「山車」と書く史料があります。「山車」と書いて「だし」とよまず、「おおやま」と読んだものと思われる。

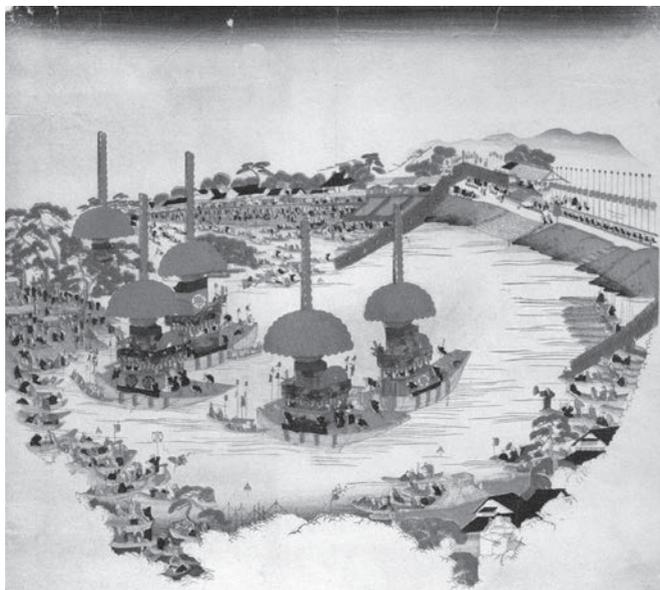


图1 津島天王祭 宵祭 (國學院大學博物館所藏)

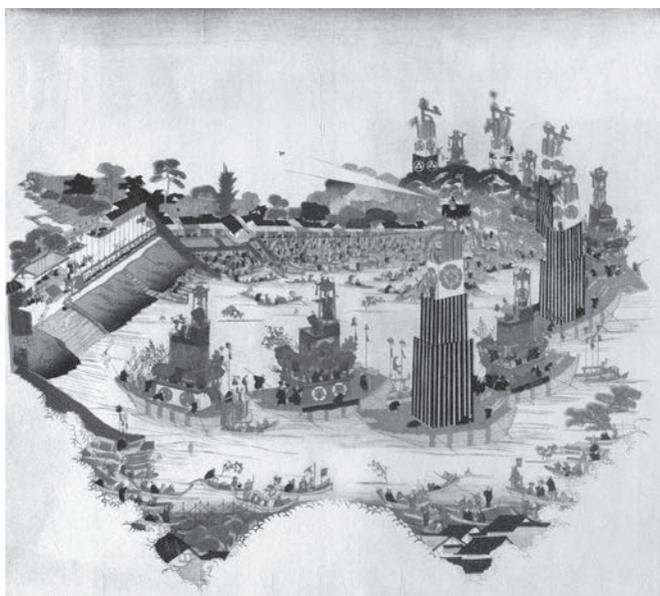


图2 同 朝祭

・國學院大學図書館『つしま祭』絵巻

こちらが國學院大學図書館所蔵の『つしま祭』絵巻です。六曲一双、左隻と右隻からなる屏風という絵画形態では非常にパノラミックに、一目瞭然に描かれますが、これは絵巻物、卷子（かんす）という形態です。

後で地形の説明をしますけれども、屏風も絵巻もまず図3の天王橋、つまり、津島天王社が鎮座する向島というところに渡っていくところから始まる。左側が中の島になっていた津島、そして、現在は神明町というところに津島神社が鎮座している。

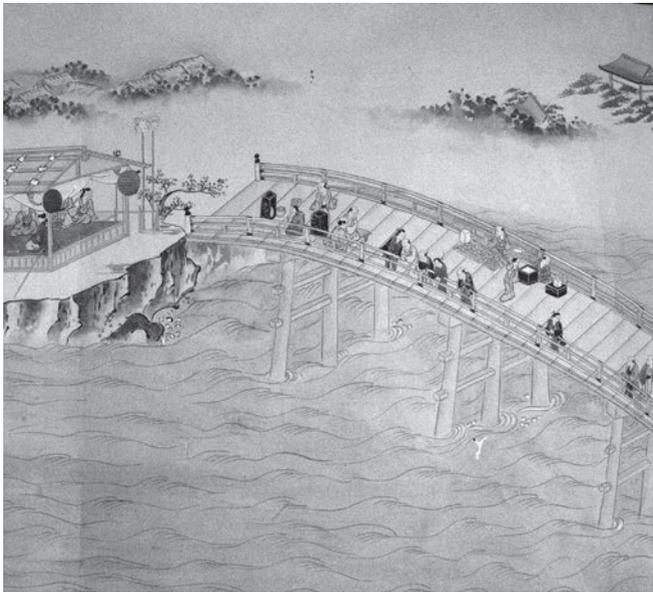


図3 『つしま祭』天王橋（國學院大學図書館蔵）

これが宵祭の巻藁船です。

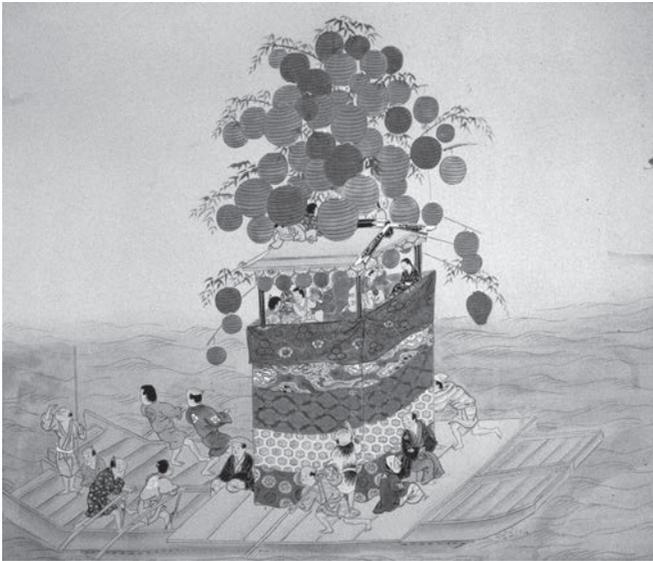


図4 同 巻藁船

絵巻物という絵画形態は、屏風や掛け軸などと違ひまして、同時に見ることのできる人は数人から10人程に限られ、一度に肩幅ぐらいの長さに広げて巻きながら見ます。そして、行列という時間的な進行と空間的な移動をあらわすには、適した絵画形態だと思われます。

この絵巻もまず図4の宵宮の巻藁船が先行して、その後に朝祭りが続くという時間的な移行が絵巻物に描かれています。先ほどの屏風とは少し違ひますが、二艘の船を繋いだ上の巻藁船です。ここではたくさんの提灯を付けた巻藁ですが、朝祭りのときにはどうなるかということの後で説明したいと思います。

先頭を行く巻藁船に続いて、他の津島の4つの村から出た楽車船が続きます。先ほどのギメ美術館、大英博物館のものと同じように、図5の楽車船にも腰の部分に鞆鼓という楽器をつけた稚児がのっています。



図5 同 鞆鼓稚児舞

こちらが、朝祭りの大山です。絵巻物というのは、天地幅が和紙の大きさに規定されるというか、私が見た中では、50センチ程が最大だと思います。定型は30センチ程という天地幅の制約によって、楽車船はかなり押しつぶされて表現されている。大山の場合はもっと大きく、20メートルになんなんとする三層立ての大山が図6のような表現になる。



図6 同 大山船

そして、先ほどの屏風で説明しましたように、本来大蛇は2層目あたりに飾られ、ここには手摩乳、足摩乳という翁、媼の2体の人形があったはずですが、『つしま祭』絵巻では鶴とそれを射ようとする人形が置かれています。

この絵巻は絵師名不詳ですが、私の想像するところ、おそらく、京都の町絵師工房の人が津島祭を実見せず、工房にストックされた情報をもとに描いた。3層目の上の作り物の岩組や松は、実際の大山にはあり得ない表現です。津島天王祭には大山というのがあると聞き、大山と言うからには、何か山状の作り物があるはずだ、と絵師が考えたのではないのでしょうか。

こちらは楽車船のほうです。先ほどの屏風、あるいは近代の錦絵にも、この上には能人形、毎年新作された或る能の1コマがつくられるはずなのですが能人形はなく、やはり岩組と松、下の層には鞆鼓稚児舞です。



図7 同 楽車船

大山は、全て大蛇が3層目を巻いている表現です。上に岩山の作り物と、もみじあるいは楓、そして、能の1場面が2層の上につくられる。

図8も大山です。やはりこちら也大蛇が二層目を巻いている。ここに鯛釣り恵比寿、この鯛と大蛇。大蛇は大山に不可欠なので、伝聞というか、大山を描くとしたら、大蛇と鯛がいるものだ、という情報は絵師に伝わっていたと思われます。しかし、足摩乳、手摩乳はこちらには描かれていない。



図8 同 大山（恵比寿と鯛）

図9が楽車船、こちらにも鞆鼓稚児舞が描かれている。これは正確だと思いますが、頂部の岩組と松は想像でつけ加えてしまったものと思います。



図9 同 楽車船

図10も大山で、連太鼓に雷神が飾られています。津島では、何年に、  
 どういう能の人形を飾ったのかという年表が研究者によってつくられていま  
 すが<sup>(4)</sup>、この出し物が何年かというのは、今のところ私は見つけることはでき  
 ません。



図10 同 大山 連太鼓に雷神

私は、この絵巻の大山の大蛇・竜蛇の表現について注目しています。私はこれまでの論文の中で、岐阜県の御嵩葉師祭礼、あるいは同じ岐阜県美濃市のひんこ祭などの大山を扱ってきました<sup>(5)</sup>。熱田神宮境内の南新宮社の天王祭は、祇園天王系のお祭りで、ここにも大山が出ていたのですが、これも明治初年になくなりました。ここにも竜蛇が出ていました。濃尾平野の大山は、竜蛇とセットになって出ていましたが、幾つかは明治初年でなくなっています。

御旅所と御本社の間には東海道新幹線が通ってしまった岐阜県の南宮大社では、現在でも5月連休の蛇山神事では御旅所の大山で蛇頭が操られて檣上に現れ、左右に回転しながら上空に伸び上がる蛇頭の舞が行われます。

このような竜蛇に関しまして、私は「美濃御嵩の願興寺祭礼」<sup>(6)</sup>で触れました。

現在ユネスコ無形文化遺産への登録が提案されている33の祭りの中で、津島天王祭と京都の祇園祭り、福岡の博多祇園山笠、この3つが中世以来の伝統を持つ祭りです。あとの祭りは、おそらく近世中後期、多くは文化文政期(1804～1830年)以降に山車、だんじり、曳き山がその地域、その地域の、いわゆる町人の財政的な蓄積とか、職人技術と相まって形成されてきたものと思われます。けれども、この津島では、少なくとも室町時代からこのような祭りが形成されていると思います。

夏の津島祭はお神葎(みよし)流し及び絵のような川祭りを中心に3カ月程にわたって行われ、悪疫、夏の疫病などに対する津島牛頭天王への信仰を背景にしております。この川祭りは、津島の5つの巻藁船による宵祭りに、翌日には市江車加わり、6艘による朝祭りから形成されておりまして、今の絵巻は巻藁船の宵祭り、メインが楽車と大山の船からなる川祭りです。

この絵巻の景観年代、あるいは作成年代の決定は今後の作業になると思います。

地理的環境について述べます。津島は尾張国の最も西にあります。特に室町時代、美濃、伊勢を結ぶ河川交通上の要衝として発展しました。そして、

室町末期に津島5カ村、米の座、堤下、今市場、筏場、下構が成立します。現在は池のようになってしまっていますが、津島天王社の前には天王川という河川が貫通しておりまして、津島5カ村が、室町時代の終わり頃から門前町として非常に栄えてきた。先ほど述べた大山や楽車の船が天王川をさかのぼる、これが川祭りとしての津島祭の姿でした。天王川の西には揖斐川や木曾川などの大河が流れている。そして、朝祭りには、南の市江島からも楽車、加えて本来は大山の船も出て、まずは市江車が先陣を切っていました。

しかし、江戸時代には天王川がだんだん浅瀬となる。つまり、川底に土砂が堆積して、なかなか浚渫、川浚いできず、港としての機能はむしろ佐屋街道、佐屋宿のほうに移り、天明5年には上流がせきとめられまして、入江の状態となり、やがて現在のようない池となってしまった。

津島の5カ村から出る5つの船は、前夜は巻藁船、当日の朝、上層に能人形を飾りかえて、楽車船、さらに明治4年までは朝祭りには5カ村それぞれに大山船、さらに市江車、計11が出、これは推定ですけれども、かつては市江にも大山があったらしく、そのときには、にぎやかに12もの船が朝祭りに出ていました。

『張州雑志抄』という近世の地誌を読みますと、大山というのは、「からみ置きたる車船（敷船）の上に第一の楼を組置き」、その上に第2、第3の楼を組み立てて、「陸地より大綱を付して曳いて積重」、「大綱を以てこれを固く結び」、この作業を「山揚げ」といいます。これに布幕をもって飾りつけたとあります。最も下の楼を一の山、その上を二の山、三の山と唱え、一番下は大体三間程（約5.5メートル）、その上はそれぞれ2間、2間、さらにその上に1間の野山、そして、2間の人形柱、あるいは屋台1間、以上高さ11間、約20メートルにもなんなんとするような大山をつくる。

二の山の前面には翁と媪（手摩乳、足摩乳）の人形を置き、その年の当番は三の山の屋台上に「鉄砲打ち」を出すのが、どうも定番で決まっていたらしい。そして、そのほかの置物としては、能から採った出し物を置いて、その下に大蛇と大きな鯛を対置し、舞わせると『張州雑志抄』にあります。

つまり、屋台の上の人形として、当番車は鉄砲打ちと定められ、他の4つはローテーションで決まる。大山は適宜人形を定めていたということです。

國學院大學図書館の『つしま祭』絵巻は、おそらくこの津島牛頭天王信仰圏ではない京都で作成されたのではないか。ガイドブック、あるいは人からの伝聞情報を得た京都の絵師、その工房が「大山」と聞いて、何か作り物を連想して、山状を表現する岩組と松を頂部に置いたのではないか。一般的な近世の絵巻物という形態の天地幅の制約は30センチ程ということもあって、上が押しつぶされたような表現にならざるを得ず、楽車の描写は写実的ではない。この絵巻は、記録画としては同時代の文献史料と対照すること（史料批判）が必要だと思います。とはいえ、決して本資料自体が使えないとか、歴史民俗学的な史料にならないわけではない。実は名古屋市立博物館にも、この『つしま祭』絵巻の参考になるような絵巻が収蔵されております。

さまざまな史料を収集して、比較検討する中で今後研究が進んでいきます。この絵巻の中でも使えるところと使えないところがいろいろあります。それを精査して史料批判を経た上で、記録画として使えるところを汲み取っていく、というのが祭礼図研究の大きな目的の1つだと思います。

## 二、神田祭に「猿の生き肝」

「神田祭に猿の生き肝」に入っていきたいと思います。

### ・近世の都市祭礼と絵画

近世の肉筆の祭礼図は、都市の祭礼行列を描いたものが非常に多いです。中でも、江戸時代の政治都市であります城下町の祭礼を描いたものが非常に多い。これは寺社側が出す神輿の渡御、あるいは馬や輿で移動する神主や僧、そういう寺社側が出すような行列。氏子の町人は山車とか、附祭(つけまつり)を出す。さらに藩士や、江戸の場合は町奉行の与力・同心などが警固・供奉する。この3部構成からなっております。つまり祭礼行列は、寺社、町人(氏子)、藩士あるいは与力や同心の供奉・警固からなる。

藩や幕府による経済的な援助がある場合、官祭、御用祭、あるいは惣町祭礼などと言われます。惣町祭礼というのは、例えば、城下町が数カ町から成り立っているとすると、一つ一つの町には稲荷とか、天神とか、城下町構成町ごとに氏神があって、そこでも小規模な祭りがあります。惣町祭礼というのは、基本的には、全ての城下町構成町が参加する。各町の氏神ごとの祭りとは異なって、全城下町構成町が参加する祭礼組織である。ある意味で、労働夫役と経費負担です。江戸時代には、身分ごとに「役」を負担する。本町人だったら、本町人としての「役」を負担する。労働夫役的な負担から、経済的なもの、さまざまな諸役の一つとして、惣町祭礼に参加する。

中には袴を着て、本町人が威儀を正して行列をするという参加の仕方もあるし、雇い祭りといって、現在の学生のアルバイトのように金を払って、町以外の人を雇（飲食、宿泊させる場合もある）う場合もある。

例えば、長崎くんちの場合ですと、江戸時代前期（17世紀頃）以来、普段、人糞を汲ませてやっている周辺の農家や港湾労働者に肉体労働や囃子方・傘鉦持ちを依頼する。

神田祭の場合は、神社の祭器、剣鉦みたいなものや神馬、社家が騎馬で行列をする。そして、神輿渡御。町奉行、与力・同心、あるいは在江戸の藩士の警固や供奉、そして、町人による山車巡行と附祭、お雇い祭りから構成されます。

この附祭とお雇い祭りというのは、移動舞台芸能、あるいは歌舞音曲や仮装の練り物が中心です。

私は一番初めに通り物、渡り物と申しました。練り物というのも、いろいろな字を充てますけれども、パレードの出し物の1つです。作り物の曳物などが、お雇い祭り、附祭として出されました。

そして、神田祭の場合は36組、現在の永田町の日枝神社の前身である山王権現の江戸山王祭の場合は45組の山車番組があり、定番の出し物があったわけです。人形の趣向など、附祭やお雇い祭りは、基本的に毎回新しく変えます。その制作費や人的な負担は非常に大変だったと思われますけれども、参加町人にとっては、誇らしげであり、「役」の負担という側面もあったん

ですけれども、楽しみであったと思います。

・国立国会図書館所蔵「神田明神御祭礼御用御雇祭絵巻」巻五

本日お話す「猿の生き肝」の曳き物というのは、36の山車番組より出る定番の山車ではありません。寛政年間頃から神田祭と山王祭りにはお雇い祭りが登場してまいります。これはどういうことかと申しますと、神田祭りの場合は、36組を構成する49の氏子町がありました。一番の大伝馬町、二番の南伝馬町から始まって、36本以上の山車を49カ町が36組に構成されて支える。一番小さいところでは、1カ町が1つの山車番組、また複数町が1つの山車番組として1つか複数の山車を出したところもありました。現在の氏子組織とは違うんですが、江戸時代の場合は氏子を「産子」と書くことが非常に多いわけですが、いずれにしても、49の神田祭の山車構成町が36本以上を出す。これが神田祭の山車のあり方です。

附祭というのは、その49の山車構成町が移動式屋台とか、地走り踊りとか、練り物を出す。これに対して、お雇い祭りというのは、町奉行が氏子以外、つまり、江戸山王権現の氏子町とか、例えば、根津神社の氏子町とか、麻布氷川神社の氏子町などに、あなたたちは神田明神の氏子町ではないけれども、盛り上げるために費用の一部を援助するからお雇い祭りを出させるものです。つまり、神田明神の氏子町ではない江戸の町々が、内容的には附祭のような出し物を出すというのがお雇い祭りです。

文政8年(1825)の神田祭は、附祭とお雇い祭りの両方出ていましたが、後者として様々な昔話のクライマックスの1コマを造形化した趣向を出しました。これを見事に描き切ったものが、国立国会図書館が所蔵する「神田明神御祭礼御用御雇祭絵巻」<sup>(7)</sup>です。この第5巻が元大坂町(現在の中央区日本橋人形町一丁目相当)で、この町は神田明神の氏子ではありません。この神田祭に元大坂町は御雇祭りとして、乙姫、童子の人形等、竜宮城の作り物を飾った2つの曳き物を中心とした行列(龍神管弦の学び)を出したのです。

この第5巻目の一番先頭は拍子木打から始まっています。『神田明神御祭礼御用御雇祭絵巻』には『神田明神御用祭 踊子芸人名前書留』という帳面が付属していて、行列に参加していた、10代後半の町娘たちの名前と年齢など、ほとんど全部の参加者が把握できます。この娘達は「鉄棒引」と書いて、「かなぼうひき」、あるいは手古舞（てこまい）と言われる。山伏が持つような錫杖の聖なる音で行列道を清めて祭礼行列をリードする。



図11 『神田明神御祭礼御用御雇祭絵巻』巻五（国立国会図書館所蔵）  
拍子木打 鉄棒引（手古舞）

次に、上り竜、下り竜の旗です。

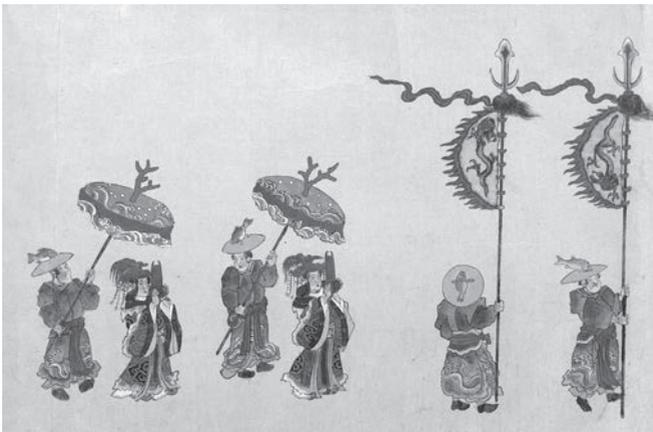


図12 同 竜神管弦の学び 形名旗のような上り竜、下り竜

魚の作り物を笠の上につけています。上り竜、下り竜の旗で連想するのは、朝鮮通信使節を先導する形名旗です。各地の都市祭礼では外交使節の行列を真似て上り竜、下り竜の旗を仕立てて行列しました。

なぜ竜宮城の一行がこういうものを持つのか。江戸時代は鎖国していたから、異国のイメージを想像力で描いたという説もよくあるのですけれども、このような異国の音、音色、見たこともないような異界・異国のイメージを「竜神管弦の学び」に仕立てました。唐人囃子の楽人たちにサンゴの作り物と波模様の長柄傘を差しかける人々、それぞれ波、竜宮、海底、異国をイメージさせ、そのような音と形、仮装で行列をして、最後に竜宮城に続くということを企てたわけです。

これは唐人笛です。この笛には竜頭の形もあります。



図13 同 竜神管弦の学び 唐人笛・チャルメラ

その後ろは、単なるラッパという解釈もできるのですが、ズルナとか、テピョンソと言われる朝鮮通信使節の人たちが必ず吹いた管楽器、日本でいうとチャルメラに当たります。現在も7月の第2日曜日、神奈川県江ノ島で行われる天王祭でも唐人・竜神囃子としてチャルメラが奏されます。このチャルメラというのは、舌の上に人工の舌状具をのせて音源とし、さらに管楽器を吹くダブル・リードという奏法です。

このダブル・リードは、タイ式ボクシングの試合前、ボクサーがリングに

上がる前に、まずこのダブル・リードの音楽で戦意を高揚させる若干のパフォーマンスがあって、リングに上がる。

ダブル・リード楽器は中国、朝鮮半島はもとより、西はトルコ、中近東、あるいはヨーロッパの東部に至るまで、ユーラシア大陸に広域に分布しています。祭りや結婚式、葬式の通過儀礼などの音楽として用いられています。ダブル・リード楽器というのは非常に広範に用いられているにもかかわらず、日本に入ってきた著名なものは、夜泣きそばの客寄せのチャルメラか、雅楽の篳篥だけです。

音楽史の研究者は、日本人の音色としては、ナチュラルな音色が好まれた、チャルメラみたいなものは、何か日本人のナチュラル感覚にとっては、人工的なノイズに聴こえたのではないかと考えており、あまり受け入れられなかったのではないかとしています。

近世には唐人あめ売りという、大道物売り（芸人）はチャルメラを吹いていたのですけれども、それも唐人の格好をして、異国の甘味をイメージしていた。そして、篳篥は、雅楽の楽器の一つとして大陸から来たという出自で、夜泣きそばも事実は別として、中国渡来のイメージがある。

絵巻に見えるこのダブル・リードの楽器は、ほんとうに吹かれて音を出していたかどうか分からないんです。非常に大勢の人たちの喧騒の中の行列なので、チャルメラの音が周りに響いていたのかはわからない。ダブル・リードは音を出すのが結構難しいので、私は、これすらも作り物で、「視られたチャルメラ」かなと。つまり、パフォーマンスとしての「異国の表象」なんじゃないか。

この団扇太鼓にしても、10月12日を中心に行われる日蓮宗のお会式の際の「てんでてつく てけどんどん」と打つような団扇太鼓と違って、やはり造形的にも「異国の表象」的なものがあります。



図14 同 団扇太鼓

図15の釣り太鼓にも竜が付きます。笠に付いているのはエビです。



図15 同 釣太鼓

花笠に造花をつけた警固の人たち、腰の一本差しはイミテーションだと思います。杖をついた町人の警固だと思います。



図 16 同 町人の警固

図 17 の先頭に竜宮城の乙姫様があらわれていますが、その後ろには隈取をして、肉襦袢を着た「奴」がいきなりあらわれる。歌舞伎などで見る「奴」振りですね。「奴」が海底に出てくるのは凧と蛸のしゃれでしょう。その次は床几持ちですね。



図 17 同 竜宮城の乙姫と奴

これが、荷茶屋とか、荷ない茶屋と言われるものです。

神田祭の場合は、現在は隔年の5月に神幸祭が行われ、次は来年5月連休の次の土曜日が神幸祭に当たります。江戸時代は、旧暦の9月15日に行われていて、現在の季節感覚だと10月下旬から11月の初旬にかけてですから、寒い年だともう初冬にあたります。江戸時代後期はもっと寒かったので、元大坂町が出した荷ない茶屋は風炉を用意し白湯、あるいは抹茶を振る舞ったようです。



図18 同 荷ない茶屋

ここからが、竜宮城曳き物の曳き手です。お揃いの半纏などを着ています。



図19 同 竜宮乙姫の曳物の曳き手

これが竜王の娘、竜女（乙姫）様です。先ほどは人間の女性の仮装、こちらが作り物の人形です。大波が押し寄せる造形の中、岩組の上、松の下に、侍女にかしずかれて、唐団扇と飾り物を差しかけられ、威儀具が掲げられる。波模様の幕が描かれ、この中で竜女様が存在感を示している。



図 20 同 竜宮乙姫の曳物

行列最後に不老門という中国の楼閣風の門、竜宮城の曳物があらわれてまいりました。元大坂町の人たちが雇った人夫、あるいは元大坂町人自身が曳いているものかもしれません。作り物の波の表現が非常に豊かで、ここに蛸や魚がみえます。そして、ここに猿、サンゴなどが見えます。猿に注目していただきたいと思います。

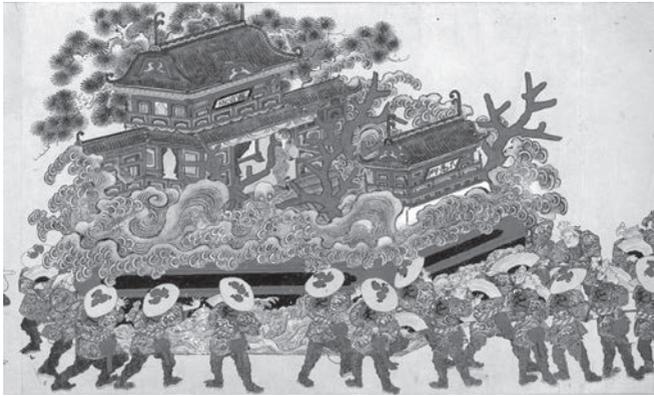


図 21 同 竜宮城の曳物

猿は薬壺みたいなものをうやうやしく持っている。私は、この図像は猿が竜宮城の竜王、あるいは病気の娘——竜女、乙姫に、自分の生き肝を献上しようとしている姿なのではないかと思っています。



図 22 同 壺を持つ猿

最後の荷ない茶屋にも風炉があり、長持の弁当と茶のサービスをする。町方が出す附祭、お雇い祭りや山車は、神田明神から江戸城内へ入り、基本的に現在の日銀のところの常盤橋御門を出ると解散します。残った2基の神輿は現在の中央区などの氏子地を隈なく渡御して、夜、神田明神に還る。

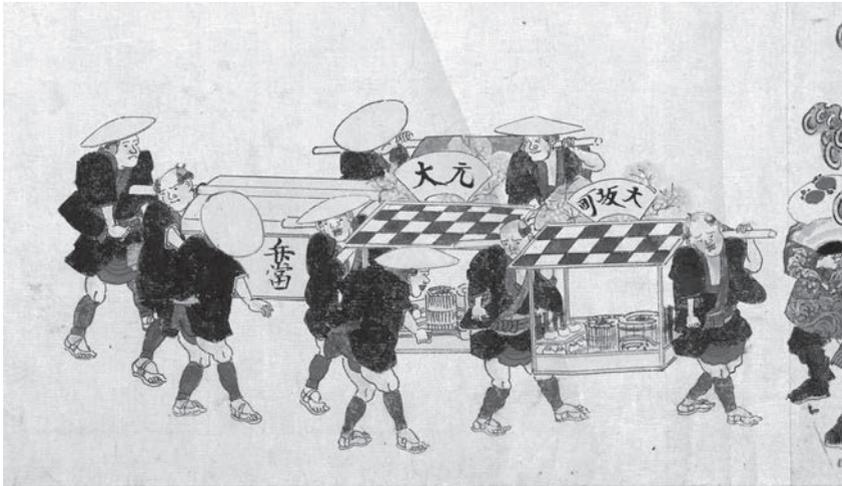


図 23 同 荷ない茶屋

#### ・神田祭に「猿の生き肝」

竜宮城の曳物の蛸の隣で、猿が壺のようなものを持っています。

実は、都市と祭礼研究会編として岩田書院から出した『江戸天下祭絵巻の世界』<sup>(8)</sup>という本の中で、私がこの部分の絵解きを担当したのですが、これが何なのかわからなかった。

しかし、「猿の生き肝、クラゲの骨なし」という昔話を造形化したものと今は考えております（西岡陽子氏御教示）。実はこの猿の生き肝というのは、國學院大学ご出身の口承文芸研究で非常に注目される研究者、現在高千穂大学教授の立石展大氏が、日中民間説話の比較研究の中でも触れられています。

立石氏は、北海道から沖縄まで日本全国 145 話の同種の譚を分析しました。大筋は以下です。

竜宮の乙姫が病気になる。治すには生きている猿を殺して、すぐに肝を取って食すことが必要とされた。使者として亀が猿を竜宮に連れてくることになる。陸へ探しにいった亀は、猿を見つけて、竜宮へ招待すると言って、浦島太郎よろしく、背中に乗せる。猿をだまして竜宮に連れてくる。

ところが、竜宮に着くと、クラゲが、実はおまえは肝を取られに来たのだとうっかり猿にしゃべってしまう。それを聞いた猿は、肝を家に忘れてきたと言って、亀とともに肝をとりに戻る。猿は陸に着くやいなや逃げてしまう。亀は仕方なく竜宮に戻り、クラゲは余計なことを言ったので、竜宮の住人たちからたたかれて骨が砕け、今のような姿になったという<sup>(9)</sup>。

最後は現在のクラゲの姿形の説明譚になっているわけです。

立石氏は、上記のような姿形の由来を解く話が、145のうち123話も占め、クラゲ、亀、タコが多いとする。肝を狙う使者としては、亀、クラゲが多いことを指摘しています。そして、竜宮や海の神などが登場する話が、その中にほとんど含まれている。『今昔物語集』巻5「亀、為猿被謀語 第二十五」には動物の姿形由来や、竜宮が全く出てこない。つまり、口承文芸の世界は、文献に見られる話から随分離れてしまって、舞台を竜宮に移しています。

昔話と同じような筋が文献で確認できるのは16世紀の終わり頃です。國學院大学出身で、学習院女子大学の徳田和夫氏の研究によりますと、室町の終わり成立の『月菴醉醒記』には竜宮城も動物姿形の由来も出てくる<sup>(10)</sup>。こういう話が日本国内に口承文芸として語られ、それが記録化されております。

また、猿の肝は中世末までは民間薬として非常に珍重され、食べる習俗がありました。江戸時代にも猿の生き肝の話が赤本などに出ているのですが、近世初頭に中国から『本草綱目』が伝来しまして、熊の胆のほうが喧伝されて以降、一気に猿の人气がなくなり、効用とか、薬効の信頼性が落ちていった。

そして、立石氏によりますと、猿の生き肝譚の骨格は既に釈迦の前生譚であるジャータカの「鰐本生」、「猿本生」にみえるそうですから、紀元前3世紀の中頃から既に骨格が見られ、それが4世紀頃にインドの説話集として展開している。中国に入りますと、経典（『六度集経』）として3世紀には猿の生き肝譚があります。

このような文献が日本の平安時代の説話集、『今昔物語集』天竺の部に入ってきました。そこでは海に住む亀の夫婦が登場し、妊娠した妻が安産のため

に猿の生き肝を食べたくなり、夫をそそのかして、猿を取りに行ってくれと頼む。夫は家に招待すると言ってだまして、猿を背中に乗せて海に出るが、途中でうっかり真実を話してしまう。そこで猿は肝はいつも自宅の庭の木にかけて干してあるとだまして、とりに戻る。猿は陸に着くやいなや木に登って、亀に向かって「身から離れて肝はなし」と言い放った。このような話なのですが、基本的には竜宮や動物の姿形由来譚というものはありません。

そこで次に、文献資料と口承文芸の相違はどこなのかということです。文献資料では竜宮譚はなく、口承文芸の結末は、失敗した使者、うっかりしゃべってしまった使者、あるいは竜宮のクラゲなどの姿形由来譚になっていますが、文献資料では姿形由来譚はありません。

立石氏以前の研究によると、中国から日本にまず文献資料が伝わった、そして、猿の生き肝譚が日本の口承文芸の世界で伝承されていくうちに、文献から口承へ現在の形に展開したのではないかと言う。それに対し、立石氏は文献による伝播とは別の東シナ海を挟んだ広域な地域交流の中で、中国沿岸部より、口承による日本伝播の道筋があったのではないかと考えています。

中国にも口承文芸としてこの話が広がっていますが、立石氏は山地型と海洋型に分類し、海洋型には竜宮、もしくはそれに準ずるものが舞台として登場するという。そして、猿や兎の肝を狙う理由は竜王、その王女の病を治すため、話の結末に亀やクラゲの姿形、生態の由来譚がつく。

山地型にはこういう譚は一切なく、先ほどのインド、中国、あるいは『今昔物語集』のような話であります。中国山地型はインドの話と内容が似ており、海洋型よりも先行して語られていた。そして、内陸部より沿岸部へと伝播するうちに、海辺で竜宮譚などがつけ加わっていき、それが文化的交流の中で日本へ伝播した。海洋民、漁師などの交流の中で日本に伝わった。

そして、今ご覧いただきました神田祭の中で、失敗した蛸が猿の横で仕打ちの仕置きによって、現在の姿、形になってしまったという説明譚、つまり、竜宮城で八つ裂きにされて、足が8本になったという説明譚がついたのではないか。

他の話でも、クラゲの場合は、失敗の罪を竜王に責められて、打たれて骨なしにされた。だから、「クラゲの骨なし」という口承文芸が多いわけなのですけれども、皮をはがれて、骨を抜かれてグニャグニャにされた。猿が「クラゲ憎し」と、松の木の上で憎まれ口をきき、陸まではい上がってきたクラゲは、猿の尻尾を引っ張り、猿は木にしがみついたので、尻尾が切れて短くなり、尻が真っ赤になったという説明譚になっております。

これらは油断禁物という教訓譚でもあります。内臓というものは、体の内部から自由に取り出せないということを知らない猿以外の他の浅知恵に対して、猿の知的優位を説くという視点であると言えるかもしれません。

祭りにおいて、猿が自分の生き肝を自ら献上することによって、薬効を顯示し、乙姫様は病気が治って、行列で元気な姿を見せているという祭りならではの霊験譚、めでたい話になる。実際の娘さんが乙姫の仮装行列をして、次に作り物の乙姫人形が続き、最後に竜宮城の曳物を作り、猿の生き肝譚がそこに結びつけられたのではないかと考えます。なお、日本の口承文芸の中では関敬吾氏と稲田浩二氏編の資料集<sup>(11)</sup>を参考にしました。

### 三、歌川国郷神田祭錦絵の資料性

そして最後に、もう一つの神田祭の絵画についてお話します、歌川国郷の錦絵（「神田大明神御祭礼図」国立歴史民俗博物館所蔵）の資料性についてです。この国郷という浮世絵師は、非常に多い国貞の弟子の一人で、彼は安政4年（1857）、5枚続きの神田祭の錦絵を版行して、その翌年、6枚続きの「山王様御祭礼図」の連作を版行したことが知られています。

本日のお話は、それが実際に安政4年の神田祭を描いた作品かということになります。私は、安政4年の神田祭を描いた作例ではないと思います。

例えば、『武江年表』によると同年の9月15日、神輿や山車は江戸城の中に入ったが、附祭の踊りや練り物、お雇い太神楽や、こま回しは出なかった。

つまり、嘉永6年、ペリー来航以来の内憂外患によって、神田祭どころではなく、安政江戸大地震もあり、以降、安政6年まで本格的な祭礼ができて

いません。安政6年が最後の入城、將軍上覧になったということは、拙論文<sup>(12)</sup>で書いています。国郷はそれ以前の「ある特定の年の神田祭」を描いたのではなく、天保の改革以前の、「神田祭の本来のあるべき、あらまほしき姿」を描いたのではないかと。つまり、いくつかの神田祭の部分取りというか、いいところ取り、寄せ集めでその錦絵を描いたのではないかと。36本の山車の形を分類すると、伝統的な大伝馬町の諫鼓鶏と南伝馬町の猿の「吹貫型」2、「岩組型」1、「傘鉾型」18、「万灯（度）型」1、「二層櫓勾欄人形型（江戸型）」3、「一本柱勾欄人形型」11という構成です。

京都の骨董商の柳孝氏が持っています17世紀の「江戸天下祭図屏風」（江戸山王祭礼図屏風）には、山王祭で麴町が出した笠鉾が描かれています。これは数人が担いでいる傘鉾型の出し物です。そういう形のものが『守貞漫稿』の中に見えます。江戸の町では移動式の舞台（踊り屋台）は、人が乗る安定性を保つ必要がありますので、基本的には4輪です。けれども、山車は2輪です。アップダウンの起伏が非常に多く、氏子圏が非常に広い。山王祭は、「だだっ広いが山王様よ」と謳われたように、広域を巡行しなければならない。加えて人間が曳くには坂が多いということで、品川の牛町から牛を借りてきて、曳かせました。

そして、台車の真ん中の一本柱の上に傘鉾をつけて、一番上に例えば武蔵野風景に見立てた月とススキを飾る、これを「武蔵野」といいます。そして、牛の背中を染織品で覆ったりする。あるいは囃子方の上に幌様の覆いをかけるようにして一本柱のものから、最終的には江戸型山車と言われるものに展開します。

『守貞漫稿』を見ますと、真ん中に2層のやぐらを取りつけて、四方に幕を回し、一番上に勾欄をつけて、屋根はなく露天で、主に能人形などを飾っています。現在埼玉県川越祭などは、基本的にこの形態ですけれども、2輪ではなく、4輪にしております。坂が少ないということもあって牛曳きではなく、人が曳く形です。

この江戸型山車と言われるものは、基本的には安政期頃、1850年代頃か

から見られますが、国郷の安政4年版「神田大明神御祭礼図」には江戸型山車も3本入っているし、それ以前の山車も入っているので、いろいろな時代の山車が混ざっているのではないかと思います。

最後に「神田大明神御祭礼図」の絵解き解説をいたします。

第一紙の⑥以前の行列として、第二紙下段①太鼓②御幣③榊木、及び第三紙下段、④騎馬の社家、⑤剣鋒や猿田彦が続き、その後に第一紙⑥の町方（氏子町）による山車と附祭が続くのである。番数字は36番の山車番組数である。

### 第一紙上段

- ⑥ 1番、大傳馬町は鉄(かな)棒引(手古舞とも言う)・幟・大団扇が先導し、二本柱の白い諷鼓鶏山車に吹貫を流している(山王祭は五彩の鶏)。手前の太い柱は車軸から太鼓支えまで伸びており、左の細い柱は唐人が六角太鼓をバチで打つためにつかまる柱らしい。事実だとすれば、非常に珍しい詳細な描写である。太鼓には弥次郎兵衛風のバランス取りの玉が付いており、牛2頭で曳く。
- ⑦ 2番、南傳馬町は鉄棒引・幟・大団扇が先導する。一本柱の岩組笹に御幣を担ぐ烏帽子猿山車に吹貫が流れる。唐人が鉦打太鼓を打ち、バランス取りの玉は⑥と同様。牛が1頭で曳き、車輪の模様は⑥と同様である。

### 第一紙中段

- ⑧ 長持2棹、3番、旅籠町一丁目は提灯持が先導する。2層檜人形の江戸型山車に見えるが、車軸中心より立てた一本柱が勾欄と人形まで貫通する構造であろう。勾欄四周には、「神田 旅籠町」とある上部幕と下部幕が垂れており、幕内の一本柱の四隅には檜(杵)はないと思われる。翁能人形の囃子は雅楽の大太鼓(だだいこ)みたいであり、牛1頭が曳く。
- ⑨ 4番、旅籠町二丁目は囃子方の後に傘鉦が見える一本柱傘鉦であり、上に額が付く。和布刈能人形の足元より波形と流れ落ちる水の造形。多くの山車が右斜め向きで描かれているが、⑨などいくつかは正面向きである。囃

子方の頭上には提灯から装飾的日覆いが掛けられている。牛1頭が曳く。

- ⑩ 5 番、鍋町は一本柱傘鉾上に四面額（万灯カ）、竜頭宝船、帆の上には宝珠、波形と流れ落ちる水の造形。囃子方には日覆い、山車後方には前方とバランスを取るために酒薦樽が置かれている。牛1頭が曳く。

#### 第一紙下段

- ⑪ 6 番、通新石町は⑧と同様、一本柱が勾欄と人形まで貫通する構造であろう。鏡を持った歳徳神、牛1頭が曳く。
- ⑫ 7 番、須田町一丁目は一本柱傘鉾の上に四面額（万灯カ）、造花の枝垂れ、岩組笹と住吉明神に松と梅（松竹梅）の山車、囃子方に日覆い、山車後方には酒薦樽が置かれている。牛1頭が曳く。
- ⑬ 8 番、須田町二丁目は一・二層間と二層上の勾欄が付いた二層檜勾欄人形山車であり、関羽人形、牛1頭が曳く。二層目の幕には孔雀が描かれている。

#### 第二紙上段

- ⑭ 9 番、蓮（連）雀町は附祭の朱傘の地走り踊が先導しているが、これが同町の附祭であるか不明である。山車は当町のみ巨大な岩組形であり、囃子座が設けられていない。囃子がないことは想定できないので、恐らく周りでの徒囃子であったものと思われる。熊坂長範人形の周辺には笹や松もあり、牛1頭が曳く。
- ⑮ 10 番、三河町一丁目も⑭と同様、地走り踊が先導し、一本柱が勾欄と人形を貫通する構造であろう。僧正坊（大天狗）牛若丸人形山車を牛が曳くのであろうが、牛は休憩中か放たれている。
- ⑯ 第四紙下段の2基の神輿がこの位置（10番と11番の間）で渡御する。
- ⑰ 11 番、豊嶋・湯嶋・金沢町は一本柱傘鉾上に、正面額（万灯カ）、岩組に武蔵野蝶、水が流れ落ちる造形、牛1頭が曳く。

## 第二段中段

- ⑱12番、岩井町は提灯が先導し、一本柱が勾欄と人形を貫通する構造。菊慈童能人形、牛1頭が曳く。
- ⑲13番、橋本町一丁目は一本柱傘鉾上に、二見ヶ浦に日の出と巨大な蛸、流れ落ちる水の造形、囃子方に日覆いが掛けられ、牛1頭が曳く。右の担い茶屋の市松模様屋根には「一」とあるので、一丁目の担い茶屋である。
- ⑳14番、橋本町二丁目は二層櫓勾欄人形山車、乙姫人形山車を牛1頭が曳く。

## 第二紙下段

- ㉑15番、佐久間町一・二丁目は一本柱傘鉾上に、岩組笹に素盞鳴命と松、流れ落ちる水の造形、囃子方に日覆い、牛1頭が曳く。
- ㉒担当町は不明であるが附祭の唄方・鉄棒引・踊屋台。踊屋台には車がないので担ぐのであろう。舞台上では女の役者が立ち、左に座る男役者が二人出演している。
- ①太鼓、②御幣、③榊木は祭礼行列全体を先導する。

## 第三紙上段

- ㉓16番、佐久間町一・二丁目は同三・四丁目の誤りであろう。同町と富松町(三丁目四丁目)が第十六山車番組を構成している。鉄棒引・大団扇が先導し、一本柱傘鉾上に四面額(万灯カ)、岩組、石台に牡丹蝶、造花枝垂れ、山車後方には酒薦樽が見える。牛1頭が曳く。
- ㉔17番、久右衛門町一・二丁目は鉄棒引が立ち、一本柱傘鉾上に松に菟亀の蓬菜、波形と流れ落ちる水の造形、囃子方に日覆い、山車後方には酒薦樽二つが見える。牛1頭が曳く。
- ㉕町家ではない仮設の棧敷席であろう。

## 第三紙中段

- ㉖18番、多町一丁目は一本柱傘鉾上に額(万灯カ)、岩組笹に石台、稲穂蝶、

造花枝垂れ、牛1頭が曳く。

- ⑳ 19番、多町二丁目は一本柱傘鉾上に四面額（万灯カ）、岩組笹に松、釧と唐冠で鍾馗を表している。流れ落ちる水の造形、囃子方に日覆い、山車後方には酒薦樽二つが見える。牛1頭が曳く。
- ㉑ 「松井原（源）水」の独楽廻しは行列においてこの位置かは不明。雇われた專業芸能者。
- ㉒ 20番、永富町は一本柱が勾欄と人形まで貫通する構造であろう。竜神能人形に、波形、流れ落ちる水の造形、囃子方に日覆い、牛1頭が曳く。

### 第三紙下段

- ㉓ 騎馬の社家、行列を先導する。
- ㉔ 21番（豎）大工町は一本柱が勾欄と人形まで貫通する構造であろう。棟上人形、囃子方に日覆い、手踊りは虎か猫面を付け、牛1頭が曳く。
- ㉕ 剣鉾と猿田彦
- ㉖ 22番、蠟燭町・関口町は一本柱傘鉾上に四面額（万灯カ）、造花枝垂れ、岩組笹に角樽・盃と松、囃子方に日覆い、山車後方には酒薦樽が見える。牛1頭が曳く。
- ㉗ 23番、明神下西町は一本柱傘鉾上に額（万灯カ）、造花枝垂れ、岩組笹に牡丹蝶、牛1頭が曳く。

### 第四紙上段

- ㉘ 24番、新銀町は一本柱に分銅形万灯「新銀」の唯一の万灯（万度）型、流れ落ちる水の造形、岩組に鶴岡八幡宮放生会放鳥（籠）、鳥居に「八宮」額、山車後方には酒薦樽二つが見える。牛一頭が曳く。
- ㉙ 25番か、26番を附祭の地走り踊が先導する。25番新石町は一本柱傘上に額（万灯カ）、岩組に牡丹蝶、造花枝垂れ、牛1頭が曳く。
- ㉚ 26番新革屋町は一本柱が勾欄と人形まで貫通する構造であろう。弁才天山車を牛1頭が曳く。

## 第四紙中段

- ③⑥ 27 番、鍛冶町は一本柱が勾欄と人形まで貫通する構造であろう。小鍛冶能人形山車を牛1頭が曳く。
- ③⑦ 28 番、元乗物町は一本柱傘鉦上に額（万灯カ）、佐々木四郎人形、波形と流れ落ちる水の造形、牛1頭が曳く。
- ③⑧ 29 番、横大工町は一本柱傘鉦上に額（万灯カ）、岩組に武蔵野蝶、流れ落ちる水の造形、牛1頭が曳く。
- ③⑨ 仮設の「年番町出シコ屋」、前に酒薦樽

## 第四紙下段

- ④⑩ 太神楽（万度御幣・籠鞠・神楽獅子屋台等）神田祭の場合、本材木町一～四丁目・弥左衛門町・新肴町の負担によることが多い。
- ④⑪ 第四紙④⑩の位置で渡御する一之宮・二之宮神輿
- ④⑫ 30 番、雉子町は一本柱が勾欄と人形まで貫通する構造であろう。町名に因む白雉子山車、囃子方は大太鼓を打つ。牛2頭が曳く。

## 第五紙上段

- ④⑬ 太神楽獅子頭屋台、恐らく柵により往来留めの見物客
- ④⑭ 31 番、三河町四丁目は大団扇と鉄棒引が先導する。一層と二層間が勾欄か否か微妙であるものの、恐らく二層櫓勾欄人形山車（江戸型）であろう。宝珠を手にした武内宿祢人形、囃子方に日覆い、牛2頭が曳く。
- ④⑮ 積み物上には造り物の懸（掛）け鯛と提灯飾り
- ④⑯ 32 番、（明神下）御台所町は一本柱が勾欄と人形まで貫通する構造であろう。石橋能人形山車を牛一頭が曳く。

## 第五紙中段

- ④⑰ 33 番、皆川町二・三丁目は一本柱傘鉦上に額（万灯カ）、岩組に唐風楼門と松、波形と流れ落ちる水の造形、牛1頭が曳く。

- ④7 附祭担当町は不明であるが、「雪月花」の内、「雪」、地走り踊と底抜け屋台
- ④8 祭礼番付売り二人
- ④9 34番、塗師町は大団扇が先導し、一本柱傘鉾上に造花枝垂れ、勾欄に猩々能人形、囃子方に日覆い、山車の後方に酒薦樽が見える。牛2頭が曳く。

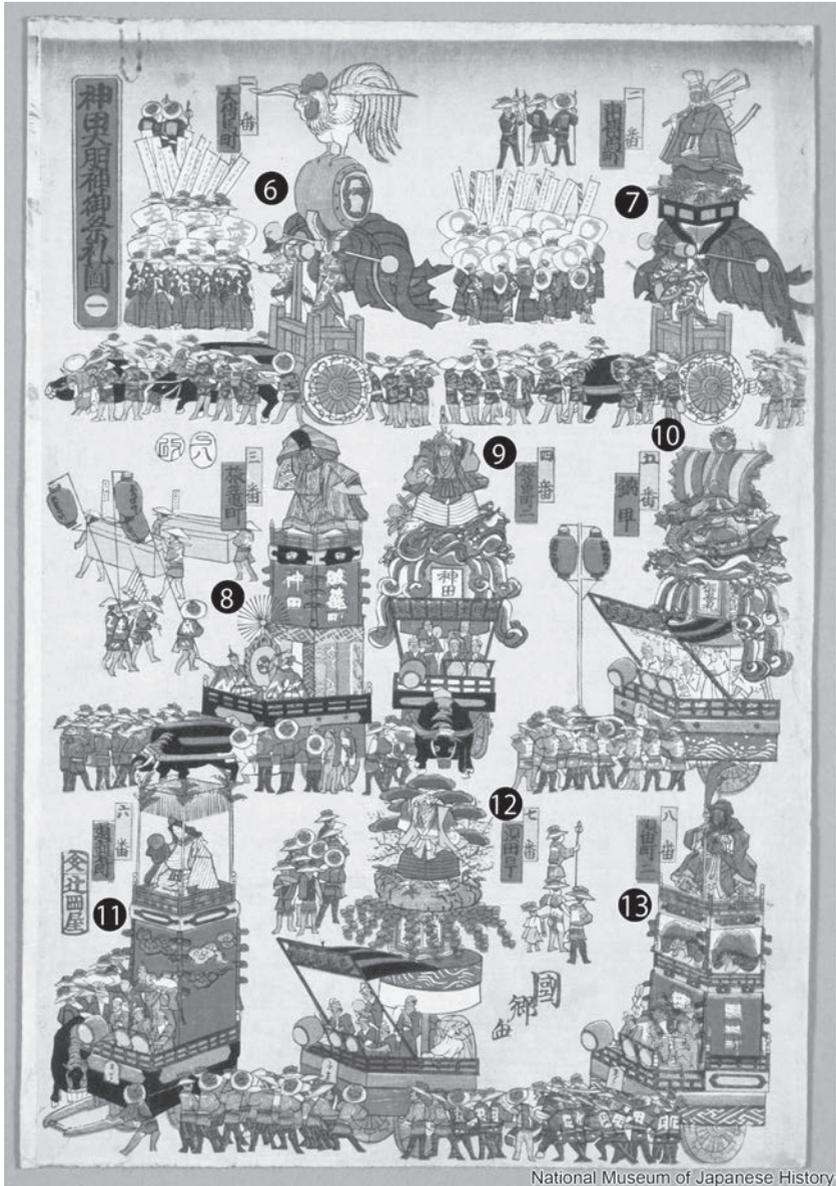
#### 第五紙下段

- ⑤0 35番、白壁町は一本柱傘鉾上に額（万灯カ）、岩組に鯛釣り恵比寿と松、流れ落ちる水の造形、山車の後方に酒薦樽が見える。牛1頭が曳く。
- ⑤1 担当町が不明の附祭の地走り踊
- ⑤2 36番、松田町は一本柱が勾欄と人形まで貫通する構造であろう。頼義人形山車を牛1頭が曳く。

最後に祭礼大幟に版元の情報が記されている。「奉献神田大明神御祭禮氏子町」の下に版元の「金松堂 辻文 はん（版・板）」。

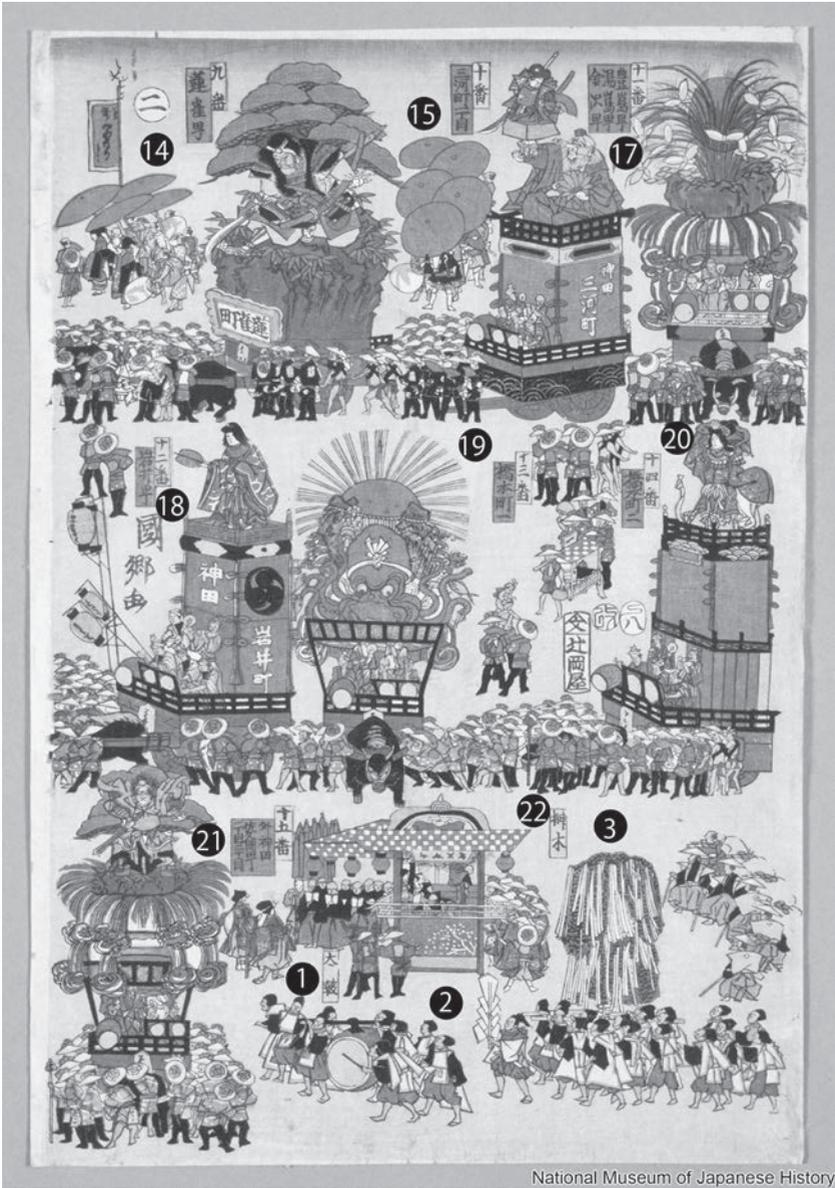
#### おわりに

現在、國學院大學博物館の企画展「祭礼行列 渡る神と人」に展示されている『つしま祭』絵巻を皮切りに、近世の絵画資料を読み込むに当たって、今回の場合は、美術的な表現という視点は一切排除しまして、記録画かどうか、当時の状況がどれだけ反映されているかという視点で、歴史民俗学の視点からお話しさせていただきました。



National Museum of Japanese History

图 24 歌川国郷「神田大明神御祭礼圖」(国立歴史民俗博物館所蔵) 第一紙  
(丸番号は福原が付した)



National Museum of Japanese History

圖 25 同 第二紙

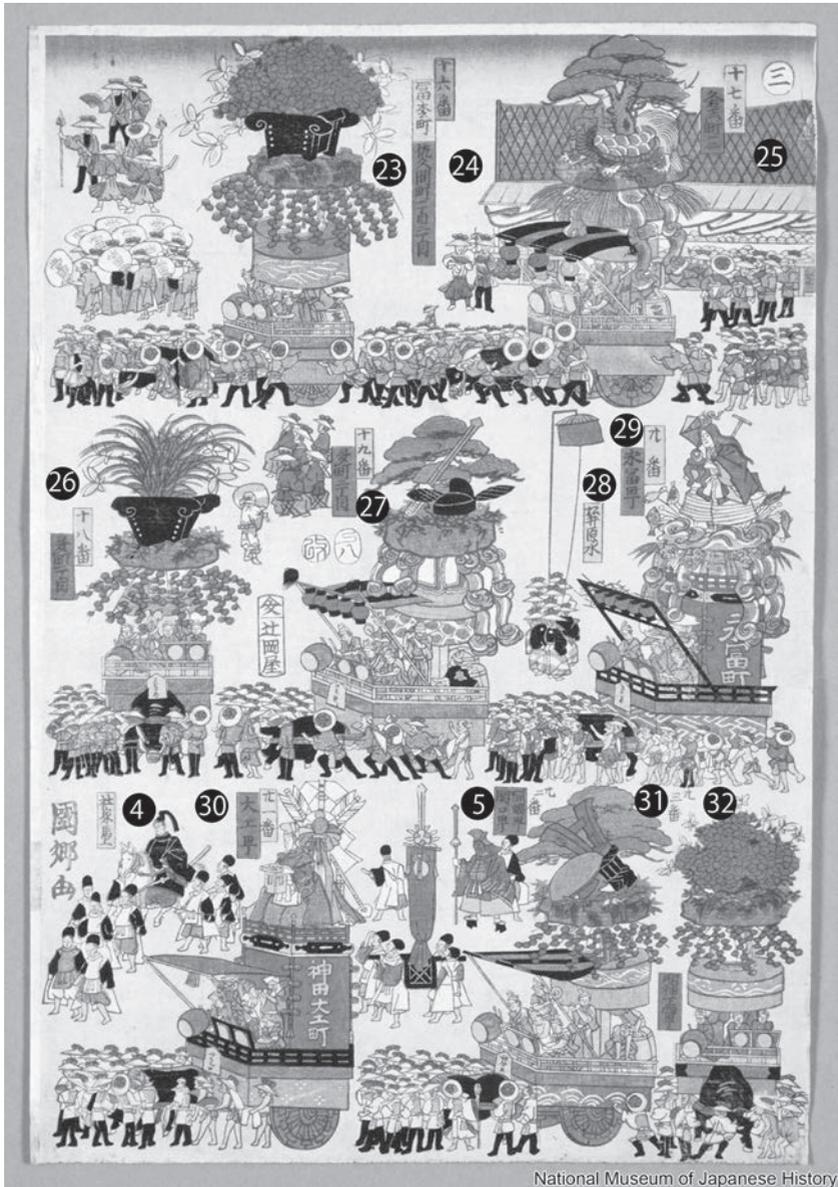
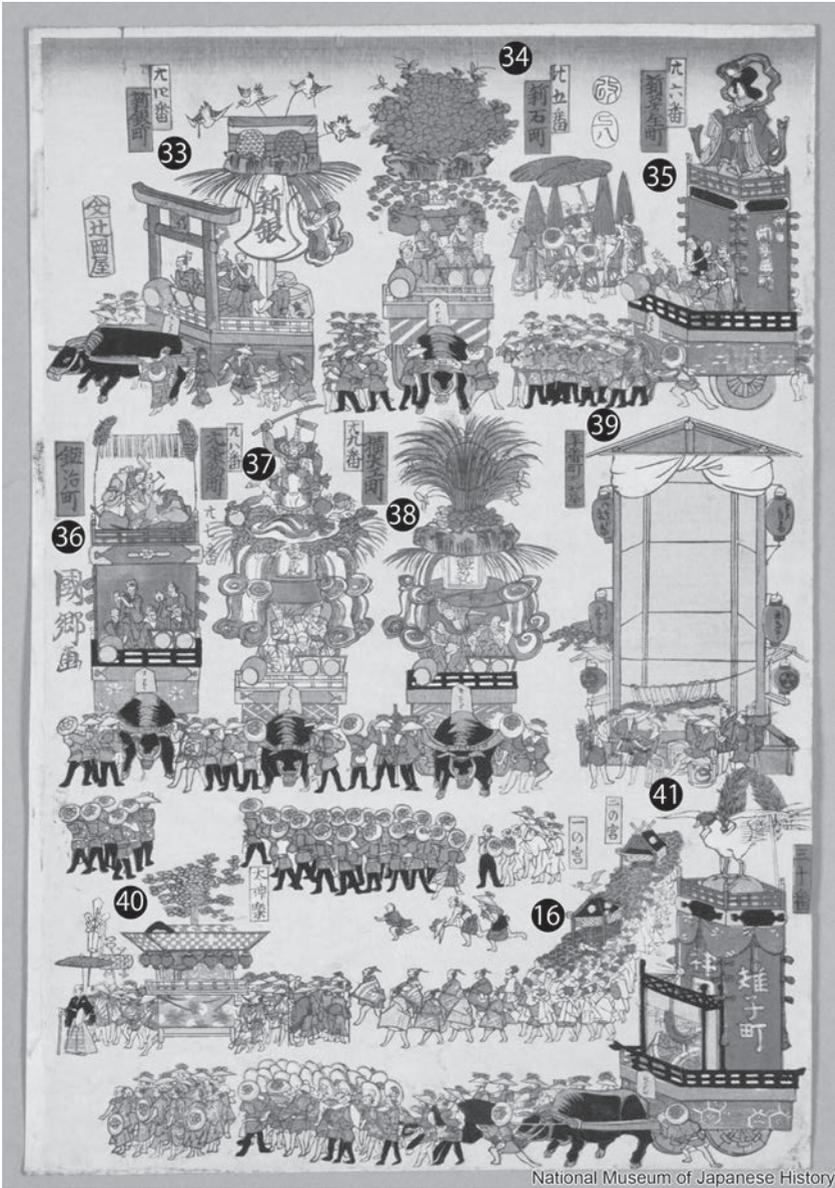


図 26 同 第三紙



National Museum of Japanese History

図 27 同 第四紙



National Museum of Japanese History

図 28 同 第五紙

## 註

- (1) 『日本の美術 484 祭礼図』(至文堂、2006年)。
- (2) 平山郁夫・小林忠編著『秘蔵 日本美術大観 6 ギメ美術館』(講談社、1994年)所収。
- (3) 平山郁夫・小林忠編著『秘蔵 日本美術大観 1 大英博物館 I』(講談社、1992年)所収。
- (4) 鬼頭秀明「津島天王祭りの山車風流一大山と楽車一」(『愛知県史民俗調査報告書 4 津島・尾張西部』愛知県総務部総務課県史編さん室、2001年)ほか。
- (5) 「戦国織豊期における諸国祇園会の羯鼓稚児舞一八撥をめぐって一」(二木謙一編『戦国織豊期の社会と儀礼』吉川弘文館、2006年)。
- (6) 福原敏男「美濃御嵩の願興寺祭礼」(植木行宣・田井竜一編『祇園囃子の源流 風流囃子物・羯鼓稚児舞・シャギリ』岩田書院、2010年)。
- (7) 同資料については、国立国会図書館デジタルコレクションにおいて閲覧できる (<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2574324?tocOpened=1>)。
- (8) 都市と祭礼研究会編(代表:福原敏男)『江戸天下祭絵巻の世界—うたい おどり ばける—』(岩田書院、2011年)。
- (9) 立石展大「『猿の生き肝』の比較研究」(『日中民間説話の研究』汲古書院、2013年)。
- (10) 徳田和夫「民間説話と古文獻—『月菴醉醒記』の「猫の茶釜の蓋」「くらげ骨なし」を紹介しつつ—」(『民間説話の研究 日本と世界』同朋舎出版、1987年) 231頁。
- (11) 関敬吾『日本昔話大成』全12巻(角川書店、1978-80年)、稲田浩二・小沢俊夫責任編集『日本昔話通観』全31巻(同朋舎出版、1977-98年)を参照した。
- (12) 福原敏男「江戸神田祭最後の城内行列と将軍上覧」(東四柳史明編『地域社会の文化と史料』、同成社、2017年)。